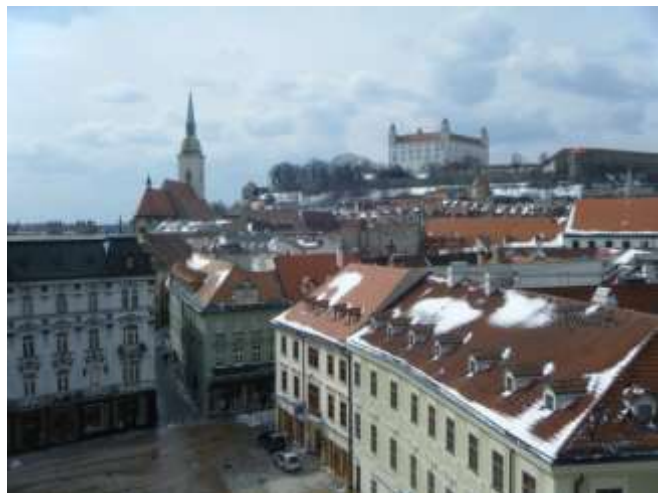


グローバル化社会と言われるようになって久しい。この新しい社会に適応するために、多くの日本人が留学するようになった。私もその一人で、1年2か月の間、中央ヨーロッパに位置するスロヴァキアに留学する機会を得た。ところで、グローバルな言語が何か、という問いに対する答えは、英語で異存はないだろう。事実、多くの日本人学生が英語を学ぶ、あるいは使うために留学を希望している。しかし、私が選択した言語はその「グローバルな言語」とは対極に位置する、マイナー言語「スロヴァキア語」であった。

スロヴァキアは人口約550万人、公用語はスロヴァキア語である。国民の約15%はハンガリー系などの少数民族であるので、スロヴァキア語を母語とする人は総人口より少なくなる。埼玉県（約720万人）よりも、スロヴァキア語を話す人は少ないのだ。マイナー言語だと勉強するのも大変である。幸いなことに、数年前に日本でも旅行用会話帳が出版された。しかし、文法などを一から勉強するには、ほかの言語（ドイツ語かロシア語か英語）を通して勉強するしかない。私はロンドンから、英語で書かれたスロヴァキア語の教科書を取り寄せ、2年間ほぼ独学で勉強した。その後、私の留学生活が始まった。



首都ブラチスラヴァの街並み

寮のルームメイトは二人ともスロヴァキア人、大学院のクラスメートも全員スロヴァキア人、授業は全てスロヴァキア語。そのような環境におかれて、最初は話すのも聞くのも大変であったが、徐々にスロヴァキア語に慣れていった。とはいえ、留学当初は苦難の連続である。寮に住んでいる人は若者か地方出身者だ。若者はものすごく早口で話すし（特に子音が連続する単語が多いスロヴァキア語ではなおさらそう感じる）、スラングも多い。当然、教科書のスロヴァキア語しか勉強してこなかった自分は全く歯が立たず、留学して最初に買った書物は「スロヴァキア口語・スラング辞書」になった。また、地方出身者は方言がよく出てくる。スロヴァキアは日本同様山地が多く、地域ごとに豊かな方言が残されている。内陸国であるため、周辺国の言語との接触も多い。私のルームメイトの一人は少数民族のルシーン系（ウクライナ人に近い民族）であり、会話するたびに苦労した。話は脱線するが、スロヴァキア特産のお酒は、果物から作られるアルコール度数52%のウォッカだ。このお酒を友達と飲んでみると、気分がよくなってみんなで民謡を歌うことがよくあったのだが、民謡の歌詞も方言と口語のオンパレードである。ともあれ、スロヴァキア語を上達させるために、現地の人々の輪の中に積極的に飛び込んでいった。



地方都市のお祭り

言葉ができるようになってくると、留学生活もだいぶ楽しくなってきた。ビザ取得のための煩わしい手続きも、スロヴァキア語が話せるなら、ということでなぜか特別対応をしてもらった。あるとき博物館に行ったときは、日本人を珍しく思った学芸員がずっと話しかけてくるものだから、結局展示をほとんど見ることができず閉館時間になってしまったこともあった。新聞のインタビューにも答え、雑誌に寄稿し、国営テレビにも出演した。とにかく、スロヴァキア語を通して交流が広がり、様々な経験をさせていただいた。それだけ、スロヴァキア語を話す外国人は珍しいのである。というのも、ほかの国から来た多くの留学生は、スロヴァキア

語を覚えようとせず、英語で全てすませようとする。それは、仕事のためにスロヴァキアに住んでいる人の多くも同じである。もっとも、これは理解できない話ではなく、マイナーな言語を学んでも役に立たない、英語が話せれば十分だ、と思うのは当然だろう。ましてや、スロヴァキアの若い世代はとても英語を上手に話す。それでも、EUの統計によると、英語を話すことができるスロヴァキア人は4人に1人に過ぎず、これはほかのEU諸国と比較すると低い割合だ。私自身、駅やスーパーで、スロヴァキア語が分からず困っている外国人を何度もお手伝いしたことがあった。しかし、スロヴァキア国内だからスロヴァキア語が必要、ということであり、将来自分がこの言語を使う機会があるのかは定かではない。

グローバル人材になるために留学をしたつもりだが、いつのまにか自分が非常にローカル化していることに気付いた。スロヴァキアというマイクロコスモスに入り浸っていたのである。ただし、このマイナー言語を通じて、多くの友人ができて、スロヴァキアの文化や歴史に精通し、修士論文の研究も捗った。やはり、スロヴァキアを深く知るためには、スロヴァキア語が必要不可欠だったのである。

いくらグローバル化が進もうと、母語を放棄してみんなが英語を話し始めるわけではないし、世界中の主食がパンになるわけではない。むしろ、グローバル化が進み、より多く外国のことを知るようになると、それぞれの国・地域がオリジナリティーを持っていることに気づくだろう。グローバル化は世界を画一化させたのではなく、ローカルな世界を浮かび上がらせたのである。つまり、ローカルな世界を深く知ることは、グローバル化社会に適応するうえで矛盾にならないはずだ。そういう意味では、私も少し「グローバル人材」に近づいたのかもしれない。結局のところ、グローバル化社会は、ひとつひとつの「ローカルな世界」から成り立っているのだから。そして、「ローカルな世界」を知る一番の



大学の巡検(世界遺産の古都、バンスカ・シュチアウニツァにて)

近道は、その国の言語であろう。



スロヴァキア北部にある氷河湖、
シュトルプスケープレン



ボイニツェ城
(スロヴァキアには古城が多い)

平成 26 年度 協定・認定留学コース奨学生
留学先：スロヴァキア国立コメニウス大学